## 緑爽会会報 No. 142

2016年2月25日発行 日本山岳会 緑爽会 発行人 松本恒廣



デザイン・制作 関塚貞亨

## ~~《報告》~~

## 1月山行 青梅七福神巡り

期日: 1月16日(土)

参加者: 13名

担当: 荒井 正人



<地蔵院―布袋尊にて>

3 段目左から 西谷隆亘、鳥橋祥子、深田森太郎、川口章子、大島洋子

2 段目左から 田井具世、田村佐喜子、渡部温子、西谷可江

1段目左から 荒井正人、瀬戸英隆、松本恒廣、夏原寿一

### 田村佐喜子

昔、"都会の鼠と田舎の鼠"という童話を聞いたことがある。昨年から都市圏になったとはいえ、 松本はやっぱり田舎と否応なく考えさせられた。発達した首都圏の交通網。前日に千葉県の 16 号 線脇の団地に住む親戚宅に泊まったのが間違いで、戸惑い、時間を気にしながら辿りついた東青梅 からの七福神巡りだった。

コンクリートの大通りは続く。右へ左へと曲がり小路を入って辿りつく寺もある。都会の人に道を聞くと「・・・右へ行き、左へ曲がって・・・」と教えてくれる。地方は東西南北だ。都会は建物が密で見通しがきかないから無理もない。急な上り下りもあり、開けた先の山あいに見えた田舎風の景色にほっとする。

青梅街道に出て旧稲葉家住宅に寄ったり、高台の寺の石段を上がって街並みの向こうの空を見直 したりして、それぞれのお寺の七福神を拝観した。そして新年にこうした機会を与えていただいた ことと無事を感謝し、心を込めてお祈りした。

最終地点の青梅駅近く、周りを見回すと古い昔の映画の看板も見え、若かった時が思い出されて懐かしい。打ち上げの会も心地よく、久しぶりに多くの方々とご一緒に歩かせていただき、朝、団地を出てから松本に帰りつくまで3万余歩の充実した本当に楽しい一日だった。

### 松本恒廣

今や小生が七福神のなかで最も崇めるのは寿老人のみである。商売繁盛も子孫愛育も学業成就も知恵も福徳も最早どうでもいい。不老長寿「ポックリ死を司る神」その名は寿老人。中国生まれの彼が初っ端に現れた。曹洞宗聞修院がそれである。青梅の七福神は比較的新しく平成4年だそうな。福禄寿の明白院、三つ目の布袋尊地蔵院を過ぎて多摩川を渡り返すと7人? のうち唯一の日本生まれ、恵比寿様の成田山清宝院。右手に昨年、自然保護全国集会の会場となった「かんぽの宿」を見て町中を行く。弁財天の玉泉寺、毘沙門天の宗建寺とめぐって大黒天延命寺で参拝おさめ。2万8千余歩。ここで一旦解散。皆、打ち上げと称してその名も我らにふさわしい「銀嶺」という飲み屋に繰込む。天井近い壁面にはエベレストの写真が。ちっちゃなちゃぶ台を囲んで"取敢えずビール"。本年も我が会にとって良き一年でありますように。

### 渡部温子

食べられない豆を2つもつけて帰って来た。薄手の靴下が原因。緑の少ない冬枯れの道は侘しいが、家々の庭先に咲く花の色が和ませてくれる。おやつも食べず(出すのを忘れただけ)に5時間、よく歩いたなあと思う。拝殿で手を合わせたが?! 何も浮かんでこない、御礼と感謝を述べてお参りした。最後の大黒天様で用意したお賽銭がなく慌てる。福神様でないところでお参りしたからだ。幾つになったらこの粗忽さは治るのであろう。

帰りの電車の中で、荒井さんが持っていた七福神巡りのガイドブックを半ば強奪するようにもらい、 来年は千葉を2人(川口、渡部)でやろうと話をしたり、再来年は埼玉、神奈川方面も良いかもな どと話したり、単純な想いだけれどもこの一冊で、毎年この1月の例会が続いてくれたらと願う。 事務方の苦心を知る私としては協力したいと思う。

### 鳥橋祥子

東青梅駅に集合した 13 人のメンバーは、お互いに新年の挨拶をし、「バスを利用しないで元気に歩きましょう」ということで、約 15 k mの青梅七福神巡りに出発しました。



冬とは思えない暖かさで風も穏やかな好天に恵まれ、歩いている と少し汗ばんでくるほどでした。7寺のうち6寺が禅宗のお寺でし たが、7寺とも落ち着いた風格のある佇まいで、心が洗われる思い がしました。

途中寄った青梅街道沿いの家の庭では、梅と桜が並んで花盛りで、 我々を楽しませてくれました。

新年早々からこれだけ歩いたので、今年はさぞかし幸運に恵まれることだろうと期待しております。

### 大島洋子

楽しい一日でした。有難うございました。七福神を廻ったことで今年一年の安泰が約束されたような気がしています。

七福神以外で印象に残った事;

- 地蔵院の宝珠梅、
- ・扇で隠したミザル、イワザル、キカザルの三猿を彫った台座があった宗建寺の石塔、
- ・玉泉寺本堂屋根に浮き出た北条氏の三鱗絞、
- ・延命寺本堂に置かれた乾ダツ婆の石像。

#### 夏原寿一

当日は、「これぞ東京の冬でござい」と言わんばかりの澄んだ青空。風もなく穏やかな七福神巡りだった。道端の花々を愛で、山々を見上げながら暖かい陽射しの中を取り留めのないおしゃべりをしながら歩く。例会ではなかなか話す機会のない方とも話しのできるいい機会だ。巡る人の少ない山の七福神は静かだ。町なかを巡る七福神の正月らしい賑わいもいいが、それとは違った良さがあった。

打ち上げ会場に到着。隣の家との間を体を横にして辿りついた裏玄関にはマットならぬ新聞紙、そして座敷はさながらイワシの缶詰、この手の飲み屋もまたよし。横座りだった私は姿勢を変えた拍子に脚がつって・・・、スツールの席を田村さんが譲ってくださって一件落着! 今、「あれは齢のせいではない!!」と自分に言い聞かせている。

青梅観光案内所への問い合わせ、実地踏査、当日の先達、そして打ち上げ会場「銀嶺」の検索まで、全て荒井さんにお世話になりました。ありがとうございました。

#### 瀬戸英隆

ああ疲れた! 感想のほぼすべてである。

全長、約15kmの七福神めぐり、たかが寺のめぐりと多寡をくくっていたのが悔やまれる。それでも午前10時過ぎ東青梅駅を出発したときは全員元気であった。

徐々に疲れが見え出したのは一番寺、聞修院を過ぎ、小曽木街道から青梅街道に出たあたりだったろうか? 角に不思議な光景を見た。新聞店である。二つの店が軒を連ねていた。朝日と毎日・・・。

が、私は突然思い出した。そう 38 年前、43 歳の時だった。第 12 回青梅マラソンに参加してこの道を走っていたのだった。昭和 53 年 (1978 年) 2 月 19 日(日)である。参加人数は当時最高の 11277人。一般の 30km と、壮年、女子、高校の 10km の 2 種目があり、私は 40 歳代の 10km に参加して約 1500人中 798 位であった。

タイムの正式記録は 49 分までで、私の記録は多分 55 分ぐらいだったろうか。要するに 49 分以内でないとだめなのであった。主催の報知新聞社(当時)の記録文を開いて分かったことはここまでである。詳しく記したその頃の手帳は紛失して今は無い。が、あの日も快晴だった。しかし寒かった。ランニングシャツに短パンだったから。

今日はとても暖かい。ごく最近この大会に参加したという、 本日のリーダー荒井氏とその話をしながら歩いた。

まだ寺は6つも残っていた。



#### 田井具世

青梅街道の騒音は些か辟易。昔ながらの懐かしい商店の建物、ガラス戸には白い文字で米・塩と書かれ、赤いポストも懐かしい。山野の草木は枯れ果て色彩に乏しい光景でしたが、和気藹々の七福神巡りは沢山のパワーを貰い、終始好天に恵まれ清々しい充実した15kmの旅でした。

#### 川口章子

私の新年の行事の一つに七福神巡りが加わったきっかけは、四国八十八ヶ寺歩き遍路にある。70歳を迎えずに旅だった両親の年齢を超えたと気づいた時、四国八十八ヶ寺を歩きたい衝動に駆られた。お寺からお寺へのお遍路の道中は、何も考えずに無心で歩きお寺に着くと手を合わせ、胸のうちが"ほっこり"しているのを感じた時の嬉しさが忘れられず、始めたのが七福神巡りだった。

今年の青梅七福神巡りはお天気に恵まれ、手入れのいき届いた境内に佇むお寺、そして歩いた道も、 距離も程良く、ありがたい一日だった。

#### 深田森太郎

松の内も明けた1月16日の快晴の朝、集合場所のJR青梅線東青梅駅に集合時間の10時に合わせて10分ほど前に着くと、すでに全員集合で小生が最後のメンバーであった。さすが緑爽会!

駅前で当番幹事の荒井正人さんの話を聞いていざ出発、最初の七福神の寿老人を訪ねて聞修院を目指す。ここから最後の大黒天の延命寺までコースは青梅街道など幹線道路を歩く処もある。すぐ脇を通るダンプの隊列にヒヤリとしたこともあったが、途中多摩川を何回か渡るなど素晴らしい景観を堪能した。適度にアップダウンのあるコースは日本山岳会の面々に相応しく健脚向き七福神巡りであった。

打ち上げは帰路の乗車駅となる青梅駅近くのおでん屋で冷えたビールで喉を潤した。談論風発の 緑爽会のお姉様方の話で楽しい一日を締めくくった。

#### 西谷隆亘

## 『裏宿七兵衛』譚

文久から元治、慶應の幕末(1861-1868)の頃を想定して著された、長編小説「大菩薩峠」に義賊として登場する裏宿七兵衛は、作者の中里介山(1885-1944)が青梅にある伝説を取材し、作中人物に仕立てたもので、青梅には彼に纏わる場所が何カ所かあるが、七兵衛の墓所が、実際に、6番目に巡礼した宗建寺にあるのは意外であった。小説「大菩薩峠」は数年前、羽村の勉強会に参加した時に、角川文庫 20 巻には一応目を通したことがあるので、盗賊・裏宿七兵衛の記憶はあったが、帰宅後、改めて七兵衛のことを調べてみた。



小説「大菩薩峠」に登場する七兵衛像は、足が迅く、『胸に菅笠を歩いても笠が落ちなかったとか、一寸摺れ違ったと思って振り返って見ると、もう遥か遠くを風のように歩いて行く彼の姿が豆粒のように小さく見えた。』あるいは『一夜に十数里を歩くことができた。… 一反の布をひいて歩いてもその端が地につかなかった』とか伝えられている。そして、『昼の中は克明に働いて、夜分になると戸を閉め切っておいて盗みに出かけます。…上州とか甲州とか数十里を隔てた処へ行っては盗んで来て、その晩方までに青梅に帰って、昼は又何食わぬ顔で山稼ぎ、畑打ちです。』盗賊

でありながら、律儀な生活振りであったから、地元青梅の人々は気付かなかったという。第一巻甲源一刀流の巻で、大菩薩峠の頂上で、机龍之助の辻斬りにあって斬殺された老巡礼の孫娘・お松が猿の群れに襲われている処に、偶然通りかかった七兵衛は、少女を助け、老巡礼の屍骸を片付け、少女を肩に背負って、武州路へ下る…」場面から登場し、誘われて、駒井甚三郎一行に合流すべく、奥州路を北上し、途中、仙台城への忍び込みに失敗し追われるが、逃げ延び、追っ手の一人で元盗賊・仏の兵助と共に得度し、石の巻で駒井甚三郎の無名丸に乗船。駒井甚三郎一行と無名丸で無人島に到着し、理想郷で新生活をはじめることを暗示して終る最後まで登場する、人間味のある、不思議な人物の一人である。

この裏宿七兵衛は青梅宿の西端の裏宿の出であったので、裏宿七兵衛と呼ばれている。聞修院から小曽木街道を南に向かい、青梅丘陵のトンネルを抜け、下り坂を青梅の街に入るが、街道は青梅駅から奥多摩方面への鉄道線路を跨ぐ。青梅・裏宿はこの辺りである。少し行くと、青梅駅から奥多摩方面の線路に平行して来る、車1台位しか通れない幅の狭い裏通りと交差する。この裏通りが七兵衛通りである。更に進むと、青梅街道に突き当たり、丁字路となる。丁字路を右折、青梅街道を西に宮ノ平方面に進む。稲葉家住宅の先で、青梅街道は鍵型に曲がる。宮ノ平方面に進むと、街道の右側にある七兵衛公園が七兵衛の屋敷跡である。現在、七兵衛の屋敷跡や農耕地などは、七兵衛の祟りを畏れて、空き地の儘か公用地などにしか使われていない。

裏宿七兵衛は、昭和26年8月6日三田村二俣尾の旧家・谷合家で清水利氏により見いだされ、日の目を見た『谷合氏見聞録』から実在の人物であることが、判明した。それによると、元文三(1738)年多摩地方に盗賊が横行し、翌年に七兵衛一味が相次いで捕えられた。七兵衛自身は10月4日に村山の三ッ木で捕えられ、11月15日に牢屋で首を刎ねられ、その首は青梅に送られ、笹の門で晒首にされたようである。

青梅の伝説では「七兵衛は天保の中頃(1840)、捕縄されて大柳河原で斬首、笹の門の番人小屋の傍に 梟首、大暴風雨が起こり、七兵衛の首は別当沢を流れ、千ヶ瀬の宗建寺付近に漂着し、住職・大湫和尚が 拾って宗建寺に葬った」ことになっている。宗建寺の過去帳では「五月三日 法山祖憧信士 年号不知 裏 宿人也 俗名七兵衛 由来不可尋 永々回向可致者成」となっていて、伝説の時代は『谷合氏見聞録』のも のより 100 年程遅い。100 年経っても未だ忘れられず、伝説として、人々に畏怖され、愛されていた七兵衛 像が浮かんでくる。

【参考文献】清水 利:『裏宿七兵衛と介山』,中里介山研究会編中里介山研究<第2号>,pp.49-55, 昭和 48 年

#### 西谷可江

間修院から明白院へ向かう途中、青梅街道(甲州裏街道)沿いに江戸時代後期に建てられた稲葉松三郎家住宅がある。当日の予定外であったが、ちょうど、くぐり戸が開いていて、入館料無料ということにも気をひかれ見学することになった。黒く踏み固められた土間に佇むと、一瞬にしてタイムスリップする。江戸時代の青梅は、宿場町として、また、全国的に販路を広げていた「青梅縞」

や「成木の岩炭」など商業の拠点として大変賑わっていた。 稲葉家は、町年寄を務め、材木商、青梅縞の仲買で当時の青 梅では有数の豪商であったらしい。建物裏には白壁の立派な 蔵がある。この白壁も青梅の成木の石灰を使った防火壁であ ろう。徳川家康が江戸城築城のとき成木の石灰を白壁の材料 に使い、大阪城、名古屋城、駿府城、二条城、日光東照宮な どにも使われていたという。蔵の前のがらんとした庭には満 開の冬桜が、それに寄り添うように白梅が暖かい日差しのも



とで楚々と咲いている。花を眺めながら皆で記念撮影をする。聞修院からここまでの長いアスファルト道の歩きで、いささか疲れた足を休め、古い居蔵で、幼い頃の郷愁にも似た思いに浸りながらの、ほっと心和むひと時であった。

青梅は名のごとく、江戸時代から梅の実が今の梅郷辺りで盛んに生産され、馬の背で江戸まで運ばれたという。数年前、青梅市梅郷の梅の木にプラムポックスウイルスの感染が見つかり、蔓延防止のため伐採されてしまった。梅郷が以前のように梅の花に埋もれるのは何時のことになるのであるう。青梅には梨の木もたくさん植えられていたそうで、私は、ときどき羽村に近い「梨の木」交差点を車で通るが、その辺りは真っ白な梨の花が江戸人を魅了していたことであろう。

青梅の歴史にふれながらの青梅七福神巡りは、楽しさも倍増する。

七福神巡りを終え帰宅後、地蔵院のことで思い出したことがある。

数年前のこと、青梅市にある御岳山で毎年開かれる「レンゲショウマ祭り」に出かけようと、わが家にある牧野富太郎の植物図鑑でレンゲショウマを調べてみると、命名者がシーボルトと助手・ツッカリーニであることを知る。ずっと以前、吉村昭の小説「ふぉんしいほるとの娘」を読んで、「いね」が青梅に縁があることは知っていた。御岳山のレンゲショウマとシーボルトと何かつながりがあるかもしれない、シーボルトは何処でレンゲショウマを採集したのだろうと思い、いろいろと調べたことがあった。レンゲショウマが「鳴滝の植物園に植えられていた」「出島に植えられていた360種の中の、水谷助六からおくられた珍しい植物のリストの中にある」ことまでは調べてわかったことであった。また、シーボルトの娘「いね」の曽孫が青梅市に住んでいること、シーボルトの門人で日本医学に貢献した本間玄調の蔵書が青梅市の地蔵院にあること、本間玄調の末裔が青梅市にある盲老人ホーム「聖明園」の園長であること、以前、聖明園の敷地内にあった医学文学館にシーボルト愛用の「薬籠」が陳列されていたということもわかった。

地蔵院にあるといわれる本間玄調の蔵書は今、どうなっているのか、閲覧させてもらえるのか、 七福神巡りの折、御寺の方に伺えばよかったのだが、またの機会にと思う。

地蔵院の宝珠梅(青梅市の天然記念物)は伐採されることもなく、三百年の古木の固い蕾はこの春、 どんな花を見せてくれるのだろう。

末尾になりましたが、実踏し、当日のご案内をしてくださいました荒井正人さん、楽しい一日を 有難うございました。

#### 荒井正人

下見をした日は寒くて、青梅は寒いんだなあと思っていました。ところが実施当日は雲ひとつなく、風もほとんどない日和となり幸いでした。

ひとつ仕入れていた話を伝え忘れたのは、明白院の上に、 昔はスイッチバックがあったという点です。

全員完歩して、目をつけていた居酒屋『銀嶺』で一杯できたのも嬉しいことでした。

担当としてはホッとしています。何か御利益があると もっと良いのだけれど、そんなに欲張ってはいけませんね。 健康で平穏な一年となりますように。



# **2月例会 JAC と JYH**(日本ユースホステル協会) **の今・・・**

期日: 2月4日(木)

出席者: 16名 山本良子、田村佐喜子、松本恒廣、吉田理一、渡部温子、平野紀子、鳥橋祥子、小野純江、大島洋子、島田稔、夏原寿一、瀬戸英隆、西谷隆亘、西谷可江、荒井正人、小原茂延、水野宰(JYH 理事長)

今月は、ユースホステル(以下 YH)の運営に長年携わってこられ、JAC の永年会員でもある山本良子さんにお話しいただき、つづいて、山本さんが懇意にしておられる JYH 理事長・水野宰氏にお話しいただいた。



YHは、青少年を表に出す---旅を通して見聞を広め、知識を深くし経験を厚くすることを目的に1909年、ドイツで生まれた宿泊施設です。2015年現在、YHは世界に3000余、日本には200余あります。YHの形態は様々で、日本では多くが自然の中にありますが、発祥の地ドイツでは一日で歩ける距離の範囲内に必ずひとつはあるとか、オーストラリアでは休暇中の学生寮を開放しているなどの例があります。尚、1909年という年は、1905年に創立した「山岳会」が名称を「日本山岳会」にした年です。何か縁を感じます。

私は高校時代に YH に入会しました。その後甲府に移住しておりました時、ペアレント(YH の管理者)に 興味があって応募しました。私は以前から青少年の野外活動に関心があったので、その方面の講習を受け ておりました。ペアレント採用に際し、YH 協会はその点を勘案して十数組の応募者の中から私共が選ばれ たと思っています。ペアレントとしての勤務は甲府と東京・代々木の2か所で、1968年~1991年の23年間 に及びました。苦労の中に多くの"みのり"を受取りました。

YH は、その目的を具体化するために交流の場を提供するという考えから、YH には必ず談話室が設置されています。私共は、YH で知り合った多くの若者たちを訪ねて世界の旅をしてきました。YH で出会ったスイス人と日本人が結婚してスイス在住。スイスを旅行するときは必ずそこに立ち寄る、そんなこともあります。退職してからの方が長くなりましたが、今日(こんにち)でも昔のホステラー(宿泊者)さん達との交流が続いております。大学生だった青年たちが今や名実ともに"おじいちゃん"です。

山行に YH を利用しては如何でしょうか。名称は "ユース" ですが、現在は若者よりも中高年の方が多く 利用しています。

・水野理事長のお話し(映像を投影しながら、最近の YH について)

YH と言えば、以前はカイコ棚式の相部屋でバス・トイレは室外というのが当たり前でしたが、最近はバス・トイレが室内にあるタイプが多くなり、個室や自炊設備のある YH も出てきました。また、ジャンボジェット機、帆船、鉄道車両、そして、フィレンツェではメディチ家のお屋敷を開放しているなどの変わり種もあります。

YH は交流の場でもあるのですが、日本人は仲間内で纏まってしまう傾向があります。知らない人々との交流を深め、新しい世界を知ってほしいものです。 (文責:夏原)

山本さんは『私の自慢話、それは、甲府での友人・山村正光さんの JAC 入会の紹介者だということです』と。 これには歓声が上がった。

\*当日の夜、山本さんからお電話があった。それは「例会で言うのを失念したが、進行中の永年会員制度の改正 について皆さんがどう思っておられるか、制度が変わるこの機会に伺いたかった」とのことであった。何かの機会に、 皆さんのお考えを山本さんにお伝えできればと思う。(夏原記)

## 米国製のコーラの缶から

関塚貞亨

三十年ほど前の 1980 年代後半で昭和が終わろうとする頃、1ドルはいまより 3 割ほど円高の 85 円~87 円前後で、輸出企業は苦境に追い込まれていたが、輸入品が安くなって日本詰めのコーラの缶より 5 割ほど容量の大きい米国製のコーラの缶が、輸入品を扱う食料品店に同価格で並ぶようになった。その缶の飲み口の構造が日本製の飲料缶と違っていて私の自然保護思想を刺激したので、当時の社会情勢や出来事とともに述べる。

#### 飲物の缶詰は敗戦後に一般化

太平洋戦争が起きる前、昭和 10 年代までの日本では缶詰は高級品で、飲み物を缶詰にするようなことは考えることもなかったと思う。それが敗戦後にアメリカ兵や、米国映画で電気冷蔵庫を開けてビール缶を取り出して飲むシーンを見たこと、何より敗戦後の食糧不足で米の配給が殆んど無く、占領軍放出のオレンジやグレープフルーツ・ジュースの大きな缶が食料の代わりに配給になったことが影響して、飲み物も缶詰にする文化が日本に浸透したのだと思う。その頃の米国製の飲料缶は普通の缶詰と同じ構造で、先が三角形に尖った専用の缶切りで▼の飲み口を開けて飲んでいた。戦前にも缶切りを使わない缶詰はコンビーフ、オイルサーデイーンなど一部にあったが、ビール缶の飲み口がタブを引っ張って開けるようになったのは60年代の後半か70年代に入ってからだと思う。

#### 日本の飲料缶はタブが離れる構造だった

実物を見たことがない世代にはわかり難いことだが、80年代当時の日本製のビール、コーヒー、コーラの缶は飲み口のタブを引っ張るとパカッと取れて、手頃な大きさの口が開き、誠に具合が宜しい。しかし取れたタブが手元に残って始末に甚だ困ることになる。無頓着にか、うっかり、その辺にポイと捨てる人が多かった。その結果、歩道は勿論、川の土手、公園、海岸など至る所にタブが散乱していたのである。そして吃驚するような出来事を目撃することになった。87年の秋に鏡平、双六岳へ登ろうと新穂高温泉から林道を1時間ほど歩くとワサビ平に着く。誰もがこれから登りにかかるので一休する処である。そのときも10人ほどが休んでいた。そこへ「山を美しくする会」の腕章を付けた若者3人が休んでいる人に同趣旨の小バッジを配っていたが、そのうちの一人がリュックからトマトジュースの缶を取り出して飲み口のタブをポイッと捨てて、飲み終わった缶だけをリュックに仕舞ったのである。自然保護運動の若者もうっかりとタブを捨てるのだ。タブがとれる構造に問題があると思ったのである。



この出来事を私のスキーの先生でもあった昭和海運の山田社長に話したところ「タブは缶の中に入れてから飲めばよい。僕はそうしている」と簡単に解決策を提示された。しかし店や自動販売機の缶は厳密にいえば清潔とは言えないが、誰も気にせずに飲むけれど、指で触ったタブを飲物の中に入れて飲むことに抵抗感を持つ人も、また空の缶の中でタブがぶつかる音を気にする人もいよう。

ところが米国から輸入されたコーラの缶のタブは缶からとれない 構造だった。その年の2月にヨーロッパに行ったが、スイスの田舎 町のコープでもパリの街角の食料品店のコーラの缶も同じ構造だった。これだと思ったので会報 514 号 (1988 年 4 月号)の自然保護随想と題して投稿した。以下にその梗概を述べる。

#### 会報『山』514号の自然保護随想

円高で米国製のコーラの缶が一部の食料品店に並んでいる。実物を見たことがない人には、わかり難いことだが、その缶の飲み口はタブを引っ張るとタブの半分が缶の中に引っ込み、半分が飲み口の端のほうに直角に立って缶から離れない構造になっている。タブは取れないから空き缶の回収には都合がよい。環境面から考えて誠に合理的と感心する。

しかし飲む人から見ると鼻先に直角に立っているタブは気になるであろう。アメリカ人はまったく気にしないらしい。タブで怪我をしたという話も聞かない。

日本でも空き缶の回収は声高に叫ばれているが、巷にタブが散乱している現状に解決策を考えない。 これでは建前論だけで、真剣に取り組んでいるとは言い難い。コーラの缶の構造ひとつにも欧米と日本の 環境問題に対する哲学の差が現れている。

#### 園芸雑誌への投稿が大反響を呼ぶ

この投稿に対する山岳会会員の反響は意外に少なかった。僅かに横浜山岳会の長老だった石川さんから「これが実現するといいね」という葉書を頂いたことを覚えている。しかし、いまは退会して消息不明だが、当時は誠文堂新光社が発行していた園芸雑誌『ガーデンライフ』の編集担当だった宅間清子会員から1ページの原稿を依頼されたので、ワサビ平での出来事、いまは故人となり昭和海運も日本郵船と合併して無くなったがが、山田社長とのエピソードを交えて詳しく書いたところ、農業、園芸に携わる人はタブの散乱する被害を真剣に考えていたのであろう。「その月の記事のベスト」という葉書や手紙が多数寄せられた、と宅間女史から聞かされた。また読者の中に園芸趣味を持つ飲料缶の関係者もいたのだと思う。昭和の終わる頃か、平成に入ってからか、いまのようにタブは取れない、しかも立っていたタブの半分も折り曲げる、という日本人の気持ちを考えた飲料缶が出回るようになった。そして巷のタブの散乱もなくなった。そのきっかけを作ったのは私の投稿だったと思っている。

#### 近藤等さんのサイン

数々の山の本の翻訳をされた近藤等名誉会員が昨秋、鬼籍に入られた。 その近藤さんにサインを頂いたことがある。2006年10月、資料映像委員会 主催の「山岳映画とライブトーク『星にのばされたザイル』」の会場でのことだ。 お名前だけは半世紀も前から存じ上げていた近藤さんに、「この方があの 近藤さん!」と思いながら、持参した『星と嵐』と万年筆を差出すときには、 まさに舞い上がり状態であった。

そのとき、もう一人サインをお願いしている方がいらした。その方はサインをいただくと「これで完璧です」と言ってその本を私に見せて下さった。そこには「近藤等」と並んでガストン・レビュファのサインがあった。



夏原寿一

### ~~ 《予告など》~~~~~~~~~~~

3月山行 3月17日(木) 渋沢丘陵散策―詳細は下記

2016年度総会 4月12日(火) 1時30分より(集会室)―詳細は下記

5月山行 5月14日(土) 越生駅→関八州見晴台→高山不動→西吾野 担当:近藤雅幸

6月山行 6月11日(土) 飯能→天覧山→多峯主山→本郷→飯能 担当:瀬戸英隆

## 3月山行 渋沢丘陵散策のご案内

日時 3月17日(木) 午前9時30分

集合 小田急線 秦野駅 改札口

コース 秦野駅 → 震生湖 → [渋沢丘陵] → 八国見山(やくにみやま) → [渋沢丘陵] →

頭高山(ずっこうやま) → 渋沢駅

•歩行:約4時間半

持物 健康保険証、弁当、雨具、その他

申込 3月14日(月)までにお申し込みください。

島田 稔

\* 八国見山は秦野市による大規模墓地計画があり、自然環境破壊で問題になっています。この件に関するお話しが当日、荒井さんからあります。



## 4月行事 2016年度総会

日時 4月12日(火) 1時30分より(集会室)

議題 2015 年度事業報告

2015年度決算報告

2016 年度事業計画案

2016 年度予算案

事務局人事について

・茶話会(2015年度を振返って、2016年度に向けて、など) \*同封のハガキは、4月5日まで届くようご投函ください。



## !<u>第32回全国支部懇談会(越後支部主催・4月9日~10日)に緑爽会から18名参加予定</u>!

福田光子(秋田)、佐藤淳志(山形)、渡部温子・堀井昌子・森武昭(\*)(首都圏)、小野純江(山げらの会)、松本恒廣・富澤克禮・川口章子・西谷隆亘・西谷可江(東京多摩)、田村佐喜子・鳥橋祥子(信濃)、里見清子(静岡)、尾野益大(四国)、吉田理一・高辻謙輔・間瀬泉(越後) (\*):4月入会

#### --- 編集後記

「1月山行・七福神巡り」の感想文を参加者全員にお寄せ頂いた。各人各様の見る目が表われていて味わい深い。 渡部さんが関塚さんに原稿の執筆をお願いしたら、関塚さんは「自慢話を書いてもいい?」 渡部さんは勿論快諾。 それが「米国製のコーラの缶から」である。自然を思いやる関塚さんの姿がここにある。(夏原寿一)

カット:中村好至惠 写真:夏原寿一